

余

暇は私たちに、「どのように過ごしたら良いのか」といった問題を投げかける。無論、人それぞれのだが、大抵の方は、自由に使える時間を手に入れた時、とまどい一つも入念な時間消費によって達成される幸せを求めることであろう。景観を専門とする私は、その喜びに溢れる高尚な時間の過ごし方を「美学的時間消費」と呼んでいる。

美学的時間消費を支えるものをイメージした時、その核となる中で光るのが景観や観光であろうと私は思っている。というのは、例えば知らない土地へ出かけ、訪れた先で「何を見て、何処で何を食べ、何処に泊まるか」といった、いわゆる「もてなし」を主体とする事柄の善し悪しが、満ち足りた時を過ごしたかの答えとなるからである。

ところで、美学的時間消費における余暇と景観との関わり、この問題は二つの視点を求めると私は考えている。一つは、心や言葉や時間と同じように人間の想像力が創る景観美、すなわち「風景を発見し、風景を創り、風景を調べ、風景を律する」ことによる美しい風景の獲得であり、もう一つは、享受する側の美的体験に関わる心構えとしての態度や作法、すなわち心身の美しさである。そして、双方によって成り立つ文化的足跡こそが、私たちの国の数多くの名勝や名所を生み育ててきたものと感じている。

さて私は今、試みに、こうした考えの下で、

各 人 各 説

美学的時間消費のすすめ —「余暇の風景学」

前橋工科大学 社会環境工学科 教授

小林 享

Toru Kobayashi



両者の関わりを踏まえながら、私たちが共有できる美的な眺め方や味わい方を検証しつつ、景観を交えた種々の「余暇のかたち」を、地方に住まうことをモデルに探っている。その構想はこうである。まず、「余暇の風景論」を語る足掛かりとして「景観力とは何か」を私なりに吟味したい。例えばそれを文化記号学に倣い、私的に解釈すると、「人文・自然地理そして歴史によって立つ地域のコンテクストの中で、社会的美意識を根本に据え、民事的視点に重きを置く生活コードの下に培う『景観文化』のあり方」となる。その一つにいわゆる「地域のアイデンティティ」があるが、これは時代の状況に応じて再定義する必要がある。しかもそれがなければ新しい価値の生成はあり得ないと思っている。続いては「景観を楽しむための五感力」へと向かう。すなわち私の考えるところの「視能、聴能、触能、嗅能、味能」を磨くことである。そして感覚の協働化があつて景観の味わいへ繋がるのである。それを手に入れた後、愉しむためなら少々足を延ばすことも厭わない「地域レベルで味わえる景観」を求める方法について、先達が突き止めた「観賞のための視覚構造と視覚様式」へと向かう。「佳景が佳景たる所以」を探るのである。さらに「日々の暮らしの中で味わう景観の見つけ方の実践」へ、そして最後に「出かけずとも満たされる景観についての私論」を述べ、結びとしたい。